



Title	塩見理化学研究所小史
Author(s)	芝, 哲夫
Citation	大阪大学史紀要. 1983, 3, p. 31-43
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8755
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

塩見理化学研究所小史

芝 哲 夫

一 まえがき

現在、大阪大学豊中地区理学部の玄関真上の二階に塩見記念室と呼ばれる一室がある。また中之島地区福島の高野病院に接する癌研究施設の入口門標に「塩見理化学研究所」の銅版と構内玄関横に戦時中供出された塩見政次の銅像の台座を残している。しかし今や塩見理化学研究所の由来を知る人は大阪大学内にも少なくなってきたので、大阪大学五十年史編集の一環として同研究所の調査を行った機会に「部局史」および「通史」に記載し得ない資料を集めてこの小文をまとめ、後世の記憶に役立てたい。大阪大学関係者および広く大阪の学問に関心を持たれる方々の参考になれば幸いである。

二 塩見理化学研究所の創立

大正五年（一九一六）大阪垂鉛鋳業株式会社専務取締役、塩見政次は糖尿病と肺病の病勢進み、自らの死の近きを悟り、その十月五日に神

戸市御影の自宅の病床に大阪医科大学長佐多愛彦教授を呼んで、かねて念願していた理化学研究所設立の意図を告白し、その計画の実施を佐多に托した。塩見は当時のわが国に最も重要であるのは基礎的な理化学であるとし、その発展を期して近い将来に大阪医科大学とあわせて総合大学創設のもととなる理科大学の母体をつくるために、私財の半分の百万円を寄附して理化学研究所を設立することを申し出た。

その時、塩見が瀕死の重病の床で佐多に示した手記の中に塩見の抱いたこの理化学研究所設立の意図と構想を示す次の語句を見出す。¹⁾

茲ニ先生ニ卑見ヲ呈シテ御尽力ヲ仰ギタキハ予テ素志ヲ申セシコトアル研究所ノ事ナリトス。世界的ニ完全ナルモノヲ設立セント欲セバ「ロックフェラー」等米国人等ノナンタル快挙ナリト雖、今日拙者ニ望ムハ無理ナリ。何トナレバ今後十年ノ寿命ヲ従来ノ如キ健康ニアラシメバ斯ノ追撃戦ニ引続キ多大ノ獲物ヲ得ベキニ可憐ナリ。猶夫ハ足ト手ヲ痛メリ。故ニ研究所ヲ設立センニハ五拾万円カ百万円ノ資金ニテ自分モ綜合的闘士トナリ、漸次ニ発達セシメンカト思考セリ。（中略）

僕ノ理想トスル所ノ研究所ハ「ロックフェラー」等ノナシタル如キ大ナルモノナリシモ有限ノ資本ニテハ広キニ過ギルヲ忌ム。若シ其事業ニ関スル一端ヲ云ハバ、東洋ニ於ケル天産物及ビ農産物ノ完全ナル「インダストリー」ノ編成、毎年二回ノ予定。此原料ヲ基礎トシタル利用状況ノ研究。臨床医学ニ関スル理化学的研究補助タラシメントス。(後略)

これによると塩見はこの時以前からロックフェラー級の大研究所設立を計画していたらしい。しかし資金が十分でないので、特に東洋特産天産物および農産物の研究と臨床医学の基礎となる理化学研究に重点をおいた研究所を夢見た。佐多はこの塩見の申し出を感動とともに受諾して、さわめて迅速に、すなわち塩見の生存中にその実現への端緒をつくろうと尽力した。まず佐多は当時の大阪の財界または政界の有力者、小山健三、村山龍平、本山彦一、中橋徳五郎と速やかに協議してその賛同を得、ついで塩見の篤志を十月八日の各新聞紙上に発表した。さらに財団法人設立のための寄附行為の規則を作成して、塩見の閲覧を経て、その申請書を同月二十一日に文部省に進達して、同日附で認可を得た。その寄附行為の一部を左に抄録する¹⁾。

財団法人 塩見理化学研究所寄附行為

目的

第一条 本財団法人ハ理化学研究所ヲ設立シ、以テ理化学及其応用ヲ研究スルヲ以テ目的トス。本財団法人ハ前項ノ外、必要ニ応ジ、理化学及其応用ニ関シ堪能ナル人物ヲ養成スルモノトス。

第二条 本財団法人ハ資産管理ニ属スル事務ノ外ハ相当ノ条件ヲ附

シテ、前条ニ掲クル事業ノ管理ヲ大阪府立大阪医科大学ニ委託スルコトヲ得。此場合ニ於テハ本研究ノ一般ノ研究ノ外大阪医科大学ノ研究教授ノ用ニ供スルコトヲ妨ゲズ。

名称

第三条 本財団法人ノ名称ハ塩見理化学研究所トス。

事務所

第四条 本財団法人ノ事務所ハ大阪市北区常安町四番地ニ置ク。但協議員会決議ニ依リ、之ヲ移転スルコトヲ妨ゲズ。

資産

第五条 塩見政次ハ本財団法人ヲ設立センガ為ニ研究所資金トシテ金壹百万円ヲ寄附ス。

(中略)

第八条 研究所資金ハ之ヲ創業資金及維持資金ノ式種トシ、金貳拾

五万円ヲ創業資金トシ、金七拾五万円ヲ維持資金トス。

第九条 研究所維持費ハ維持資金ノ利子ヲ以テ之ヲ支弁シ、如何ナル場合ト雖其元本ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ許サズ。

(後略)

理事 小山 健三

監事 塩見 高年

同 本山 彦一

協議員 小山 健三

同 村山 龍平

同 本山 彦一

同 中橋徳五郎

同 佐多 愛彦

同 塩見 高年

この財団法人の設立によって、当時のわが国においては「先例なき純学術研究所」の創設がはかられた。時あたかも政府においても高峰譲吉の提唱による国民科学研究所の計画が進められつつあって、東京においてこれが理化学研究所いわゆる理研として設立実現されたのは塩見理化学研究所創設の翌年大正六年（一九一七）三月であった。しかし東京の理化学研究所は国家的事業として行われたのに対して、塩見理化学研究所は一個人の独力によって始められようとしたところに時代の機運を越えた対照が際立っている。塩見理化学研究所の事業の管理は大阪医科大学に委託され、その研究・教育にも役立つことが期待されたが、これは既に当時より計画されていた大阪における理科大学の創立の基礎となり、総合大学実現を促進することが意図されていたものといえる¹⁾。

塩見はこの直後の十月二十四日に享年三十九歳で死去した。同月二十七日に大阪の津村別院（北御堂）において宗教上の儀式を廃した告別式が行われ、佐多はその告別の辞の中で、前述の塩見の手記になる研究所設立の意見書を發表した。

三 塩見政次の人と業績

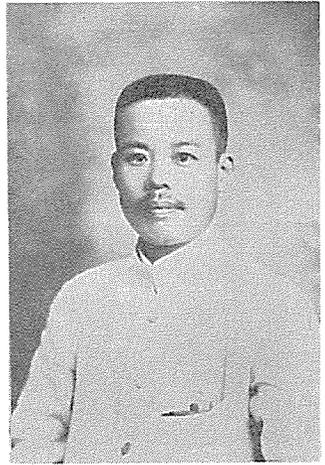
自らの死に臨んでその資産とともに理化学研究所設立を委託した塩

見政次とはいかなる経歴と業績の人であったか。

塩見政次は明治十一年（一八七八）一月五日、岡山県美作国久米郡西川村大字通谷に塩見隆造の二男として生まれた。父祖の医業を継ぐべく、大阪医学校に学び、明治三十三年（一九〇〇）七月同校を卒業した。同年京都帝国大学医科大学生理学教室の助手となったが、兵役の期満ちてのち、同三十六年（一九〇三）大阪高麗橋において医を開業した。その後、日露戦争に出征、帰還後、大阪市医師会議員に選ばれ、市の医政に参画して、医業を継続するかたわら、明治四十年（一九〇七）緒方正清（現在の東区今橋三丁目緒方婦人科病院創設者、緒方洪庵の孫千重の夫）らと共同して、合資会社喜多尾化学研究所、のちの大阪化学研究所を設立して、新薬レスピラチン、ロザール、ヨチシンなどを創製発売した。

塩見は当時のわが国の亜鉛の供給がすべて輸入に仰いでいた状況に着目して、本邦最初の亜鉛精煉鋳業の開発を志し、まず明治四十二年（一九〇九）六月、尼崎に合資会社大阪鋳業試験所を創設して亜鉛精煉の研究に入った。同四十四年（一九一三）十月には藤田系資本の援助を得て、尼崎に大阪亜鉛鋳業株式会社を設立してその専務取締役となり、安治川、西島の工場に加えて備中（現在岡山県笠岡市）神島に画期的な工場を建設した。

周囲一四・五キロの笠岡沖の小島の神島に工場誘致を行ったのは神島出身の帆船海運船長、長鋪文太郎であったという³⁾。この神島工場における亜鉛精煉の本格的活動によって、電気精煉法の勃興をうながした。またそれがわが国特有の工業となる基因となり、また亜鉛鋳の焼



塩見政次 (大正4年撮影)

鉱より生じる亜硫酸ガスから硫酸製造が行われ、肥料晒粉の製造にも及んだ。そのことがこの神島工場がのちに神島硫酸製造所、神島人造肥

料会社を経て、昭和十一年(一九三六)には神島化学工業に発展する基礎となった。現在は三菱系コウノシマ化成と変って過リン酸石灰の製造を行っている。³⁾

さて神島に始めて大阪亜鉛鋅業の工場が開かれて数年後には第一次世界大戦が始まり、世界的に亜鉛の需要が急増したために、塩見の大阪亜鉛鋅業もこの機運に乗じて飛躍的に発展した。大正四年(一九一五)には神島工場の職員数は四百名、工員は八千名を数えるに至り、年生産額は二千五百万円以上に達し莫大な利益を計上した。その結果、わが国は一転して亜鉛輸出国となり、塩見の得意絶頂の時が到来した。

この夏、塩見は日本全国より亜鉛関係者三万人を神島に招待して工場を公開し大園遊会を催した。³⁾しかし好事魔多し。事業の発展は必然的に塩見の多忙を強い、その休息を許さず、遂に糖尿病と肺結核の浸すところとなり、大正五年十月、塩見の若き生命を絶つに至った。

その死の直前に塩見が前述の理化学研究所設立のためにその資産提供を申し出たのである。塩見はその経歴を見ても、最初医学を志しながら理化学を好み、実業家の道に入ってから「凡そ事業家を志す者

は理化学の知識涵養こそ必修である」との信念を固め、実際に製薬、そして化学工業に従事するようになって体験的にますます基礎理化学の重要性を確信するに至ったものと思われる。さらに国際場裡での事業家としての経験が一旦世界情勢が変わってわが国が逆境に立たされた場合には最も頼りになる根底は理化学の研鑽であって、すべての生産はそれに須つべきものであり、そのような文化の開発が国家百年の大計というべきものであるという塩見の強い信念となつて行つた。

かねて、「子弟の為に財を遺さず、財を以って祖先の余沢に依頼するを最も戒む」との持論の持主であつた塩見はたまたま時運によつて得た個人的余財は豪華な生活や子孫の美田に費すべきものでないとして研究所設立を思い立ったのである。

また別に塩見がこの挙に出た時代的背景には前述のような政府による理化学研究所設立の機運の他に、大阪に理科大学を起そうという動きが塩見の卒業した府立医科大学を中心に拾頭していた事実を見逃がすことができない。そのことについては次章にゆずるとして、塩見は甲南御影の地に四千坪の広大な宅地を購入した時にさらに近隣に拡張して理化学研究所を設置することを既に夢見ていた。¹⁾しかしこのような研究所は元来高等な学問の府である大学と連合して運営されなければ実を挙げることができない、一私人の経営では非常に弱体化するから、実際の運営にも便利で永遠に継続する基礎をつくるためにも政府もしくは官公立学校に管理を托すべきであるとして、臨終近い病床での佐多学長への依頼となつたのである。工業都市大阪の物質的雰囲気に科学振興の源泉である理化学研究所が生まれれば百花繚乱の高等

学府ができ上り、篤学の士が安んじてここで研究に従事することができ、科学の権威を発揮して偉大なる業績が陸続として現われることを確信するというのが当時の塩見の心境であった。

塩見の応用科学発展の基礎は理化学に求めるべきであるとの信念は非常に強く、たとえ「医、文、工等の諸分科の総合大学として設備充実、絢爛の美を極むとも、理化学の発展之に伴うなく、學術の根本培養を怠らば、一國の文化は許すに独立不羈を以てする事能はざるべし」と強い調子で述べ、「かゝる基礎的研究を度外視し、只管応用の範圍に出頭没頭して、目前の現象にのみ捉はれつゝある者は、遂に時代の進運に遅れ、一國の文化は全く跛足の状態に彷徨すべし」と断言している。耳を傾むけるべき言葉である。さらに塩見はそのような理化学の基礎は数学であるといい、また医学はすべて理化学を基礎とし、理化学の補助がなければ了解し得ないものであると述べている。この数学尊重と医学の基礎としての理化学の位置づけは開設された塩見理化学研究所の特徴として反映された。

塩見の人格を伝える逸話はその自叙伝「吾が半生」に多く記載されているが、死の床で家訓として述べた言葉に「交際先を撰ぶにも、使用人を採用するにも、総べて人格を中心の問題とし、他に長所ありと雖、人格なきものは之れを近づけざる事」の一節がある。事業家としての成功の秘訣の一つはそのように人を見る眼の確かさにあったのかもしれない。その反面部下に対しては時に痛烈な怒りを発し、そしてまた一方では淡泊で根に持たない性格であったらしい。しかし事業経営に関しては常に超人的な執拗なねばりと精神的な強気を貫いた性

格の持主であった。それが塩見の早い死をもたらした遠因でもあった。

四 大阪大学創立における塩見理化学研究所の役割

塩見政次の死に臨んでの財産提供による理化学研究所の設立に当たっては「現に同大学（大阪医科大学）に計画なる理科大学の創立に向つて、其理化学教室として之を使用し、以て大阪理科大学の興隆を速成せられんこと」が塩見によって希望されていた。

それより前、日清戦争が終った明治二十八、九年の頃、当時の政府において西園寺公望文相、牧野伸顯次官によって東京帝国大学以外に、第二の帝国大学を創立する計画が進められた。その時法文系を京都に、医科を大阪に置くという案が立てられた。牧野次官はこれをまず大阪府内海忠勝知事に交渉し、内海知事はこれを府会に諮った。府議会は大学の政府移管の利点なしとしてこの提案を否決した。かつて維新直後、大久保利通は京都より大阪への遷都を画策し、その予測の下に大阪に明治二年（一八六九）、理化学校に相当する舎密局せみやうくと医学校が開設されたのであるが、大阪遷都が実現しなかったために、舎密局は結局は普通高等教育機関となつて、明治二十二年（一八八九）には京都へ移つて第三高等学校となり、医学校は一旦中絶の後、府管轄の大阪医学校としてこの年まで連綿と続いていたのである。再びこの大阪医学校を政府直轄とする提案を行った牧野伸顯は奇しくも大久保利通の次男であったことに歴史の偶然と必然の戯れを思う。大阪府の処置に強い失望を感じた牧野はそれにもかかわらず大阪医学校とは別に第二帝国大

学医科大学および病院を大阪に建設するべく、東区空堀付近を候補地としてその設計に入ったが、京都府からの誘致運動に屈して遂に京都に帝国大学医科大学が設置されたという経緯がある。⁴⁾

このような事情によって大阪医学校では清野勇校長以下奮起して大阪に新たに医科大学を創立しようとした。しかしそれには京都帝国大学の一分科大学となるか、または医学校以外に一つの理科系分科大学を興して、これと連合して大阪帝国大学を新設するかのいずれかであると考えられた。すなわち明治二十九年（一八九六）当時において現在の総合大学としての大阪大学の構想が芽生えていたことは特記されてよいであろう。明治三十年（一八九七）にはこの計画の実施に向かつての施策の第一歩としてまず優秀な教授を養成する目的で大阪医学校教諭の洋行が大阪府の費用によって行われた。当時国の官費によらないで府県の費用で洋行がはかられたことは画期的なことであった。

しかし当時の政府の財政状況においては新しい帝国大学が認可される可能性はまずないものとして、次善の策として考えられたのが専門学校令を改訂して大阪医学校を大阪医科大学に昇格させようという改革案であった。この運動は明治三十五年（一九〇二）大阪医学校校長となった佐多愛彦によって強力に推し進められ、また学外では三十四銀行頭取で元文部次官の小山健三が中心となって推進されていた。ま

ず明治四十一年（一九〇八）に大阪医学校は大阪高等医学校に、ついで大正四年（一九一五）には府立大阪医科大学と昇格、改称された。佐多が塩見より理化学研究所創立基金の申出を受けたのはその翌年の大正五年（一九一六）で、この時佐多は前述のように「現に同大学に

計画中なる理科大学の」理化学教室にこの理化学研究所を使用した」と述べている。²⁾ すなわち大阪医科大学への昇格がきまった直後から総合大学設立のための理科大学の創設が既に計画されていたのである。したがって塩見による理化学研究所創設費の寄附申出は総合大学創立計画にとってはまことに時宜を得た状況設定となったため、当事者の佐多を非常に喜ばせたものと思われる。

さらに翌大正六年（一九一七）における中之島の医科大学病院および学舎の火災に際して佐多は「将来文理科大学を増設の際には、予科を高等学校と文理科大学に分割し」、その高等学校と別に病院の分院を併わせて設立する理想のもとに当時の大阪府豊能郡石橋待兼山の地に三四、二〇〇余坪を購入する計画を立ててこれが実現したが、この予科と分院の土地は現在の医療技術短期大学部の場所である。因みにこの時佐多は敷地の南方に二万坪近い村有池（中山池）があるが、将来これを埋め立てれば運動場として使用でき、全敷地は五万坪以上になると述べているのは現況に照らして興味深い。いずれにしても、当時佐多の脳裡には医学校以外に文理科大学の併設による総合大学への飛躍の計画が強く占められていて、塩見理化学研究所設立はそれと深い関係にあったことは以上の諸事実より明らかである。⁴⁾

大正五年（一九一六）十月二十一日をもって認可を受けた財団法人塩見理化学研究所は翌六年五月研究所の建物をまだ持たないまま、理学科、化学科より成る研究所組織を整え、佐多愛彦がその所長に任じその活動に入った。大正八年（一九一九）には五月公布の大学令の最初の適用を受けて府立大阪医科大学は公立大阪医科大学に認定昇格

した。その医科大学病院に接する北区堂島浜通三丁目一番地の地に、大正十四年（一九二五）に始めて塩見理化学研究所の建物が完成した。

最初に述べた現在の癌研究施設の建物がそれである。この建物建設によつて塩見理化学研究所を基礎として新たに理科大学を創設する機運が一層高まり、昭和五年（一九三〇）に至つて大阪府知事として着任した柴田善三郎と大阪医科大学長楠本長三郎との間で医科、理科を中心とする大阪総合大学創立の案が検討され、その折特に塩見理化学研究所の協力が求められた。後に柴田はこの大阪帝国大学設置案を計画するに当たつてまず塩見財団の意向を確かめ、その協賛を得たことが総合大学案実行の決心を固めた一大動機であつたことを告白している。

実際に塩見財団の維持資金七五万円（別に積立金一五万円）の内四〇万円を理科大学創設費に寄附することが提案された。その結果、大阪の官学財界挙げての総合大学設置要望運動が盛り上つた。しかしその後も幾多の難関があつたが、遂に政府を動かして昭和六年（一九三二）三月二十五日に大阪帝国大学設置案が帝国議會を通過した。これによつて予定通り塩見理化学研究所は同年五月一日附をもつて四〇万円を大阪府知事に提出し、大阪医科大学蓄積金等と併わせて一八五万円が大阪帝国大学設立基金とされ、そのすべてが理学部創設費に当てられた。この理学部創設に当つては他に政府資金による援助は全く受けなかつた。

左の一文は柴田大阪府知事より佐多塩見理化学研究所理事へ宛てた当時の書翰である。

拝啓 益々御清穆奉賀候。陳者本府民多年鶴望し来れる大阪帝国大

学の愈設置せられたるは洵に御同慶至極に存候。右は全く貴下格別の御高配に依る処不尠而已ならず殊に其の理学部創設資金寄附金中へ塩見理化学研究所資金より金四拾万円御寄附の上種々御後援被成下候段有難く感謝罷在候。茲に不敢取御挨拶申述度如斯御座候

敬具

昭和六年五月廿六日

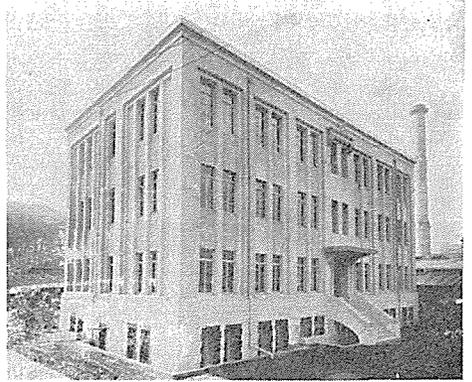
大阪府知事 柴田善三郎

塩見理化学研究所

理事 佐多愛彦殿

塩見理化学研究所は右に述べたように多額の資金を理学部創設費に寄附したのみならず、後に述べるように多くの研究所の有力研究員を理学部に出出させることによつて人材供給の任も果たしたことになる。当時の研究所の全資金は九〇万円であつたが、人員転出によつて人件費の節約が見込めるために、經常費を約半減して維持費を五〇万円とし、残りの四〇万円を寄附しても研究所の経営には支障を来たさないと考えられた。さらには理学部発足以後もその本館建物の建築が完成するまでの昭和七年から九年の間、塩見理化学研究所の一部が理学部の研究、授業用に使用された。また塩見研究所は当時既に貴重で入手困難であつた多数の数学、物理学、化学関係の外国學術雑誌のバックナンバーの収集に努め、後にこれらを理学部図書館へ移管することによつて、理学部における研究調査上の便宜に資するところも大きかつた。

しかしながら塩見理化学研究所の佐多理事は前記の四〇万円を大阪



研究所 化学 物理 見 塩

帝国大学創設費として財団から寄附するに当たって大学側に次のような研究所管理に関する希望条件を提出した。すなわちまず今後研究所の事業は大阪帝国大学の管理に委ねること、次に昭和八年(一九三三)度以後は研究所所長および研究員の俸給は大学から支給することというのであった。⁶⁾

その頃のある日、長岡半太郎大阪帝国大学新総長は渡辺書記官、西尾事務官を連れて佐多理事を堂島の自宅に訪い、財団法人塩見理化学研究所全体を大阪帝国大学に寄附してもらいたい、そうすれば大学の一室内に塩見講座という名を設けて永遠のものとするを提案した。しかし佐多の返答は研究所からは既に四〇万円を寄附している。塩見財団の解散は故人塩見政次の本志でないとしてこれを拒絶した。当時の当事者の論理と心のくまには後世の推測だけではうかがい得ない何かがある。結局小倉金之助研究所長と真島利行理学部長との間の交渉に移って、研究所を大学の管理としない、しかしほとんど全員の職員の俸給は大学から支給するというで話し合いがついた。⁶⁾ これより幾十年かの後に後述するように長岡の提案通りの塩見研究所の解散、大

学への吸収が行われたことも時の流れというべきであろう。

五 塩見理化学研究所の出発と推移

大正六年(一九一七)五月二十八日塩見理化学研究所発足に当たり、塩見財団はその研究組織を左のように定めた。

所長 佐多愛彦

理学科長 清水武雄

物理学部長 清水武雄

理論物理学部長 未定

数学部長 小倉金之助

化学科長 古武彌四郎

生物化学部長 古武彌四郎

純正化学部長 未定

当初の研究所員は大阪府立医科大学教授を、昭和八年以後は大阪医科大学予科教授、講師を兼任した。研究所はまず大正六年(一九一七)五月に清水武雄を米国および英国に留学させ、同年九月に古武彌四郎を欧米に派遣した。さらに大正八年(一九一九)七月には物理学部員岡谷辰治を欧州に、同年十二月に小倉金之助をフランスに、翌九年六月には化学部員内藤鋼一を欧米に派遣留学させた。これらの人々は大正七年(一九一八)から大正十一年(一九二二)にかけてあいついで帰国したが、内藤はドイツのケルンで客死した。研究所の建物が完成するまでの期間はたとえば数学部と物理学部は大正八年(一九一九)の秋より石

橋待兼山に新築された大阪医科大学予科(現医療技術短期大学部)の建物を間借りして仕事を始めた。

大正十三年(一九二四)には佐多愛彦の後任に清水が所長に就任したが、翌年清水は長岡半太郎の後任として東京帝国大学教授に転職した。大正十四年(一九二五)六月、清水の後任に小倉が所長に就任、翌年研究所組織を改めて、科長および部長制を廃して研究員を置くこととした。東京帝国大学で長岡の助手であった浅田常三郎は清水の東大転任に伴って、まず文部省在外研究生として外国留学の後に本研究所所員として就任することが内定されていた。浅田は昭和三年(一九二八)四月帰国して物理学部研究員となった。同年六月には化学部研究員近野政次が欧州に派遣されたが、翌年ドイツのゲッチンゲンで客死した。さらには昭和六年(一九三一)一月化学部研究員千谷利三がドイツへ留学した。

このようにして海外派遣の研究員の帰国を待つて大正十四年(一九二五)三月に当時の北区堂島浜通三丁目一、現在の福島区福島一一一―一五〇大阪大学付属癌研究施設の地に四、三五五坪の敷地を得て、建築費一三五、〇〇〇円で近代的三階建鉄筋コンクリート建築が設計起工された。同年十二月に地鎮祭を行い、翌十五年十二月に竣工した。さらに総経費一一五、〇〇〇円をもって内部の一切の設備を完成させ、前述の陣容による研究活動が開始された。

大正五年(一九一六)の研究所発足当初より昭和六年(一九三一)三月に至る間の研究所の支出概算は左の通りである。

一 研究員海外派遣費 六五、三四〇円

一人件費	一八五、〇八九円四五銭
一 図書および雑誌購入費	九〇、七五六円四六銭
一 器械器具購入費	三二、七九一元二二銭
一 建築費	一三五、〇〇〇円
一 研究所設備費(器械類)	五八、〇〇〇円
一 雑費	一三五、〇〇〇円
合計	七〇一、九七七円一三銭

昭和六年(一九三一)六月の塩見理化学研究所職員は左の通りであった。

所長	数学	小倉金之助
研究員	理論物理学	岡谷 辰治
〃	実験物理学	浅田常三郎
〃	理論化学	千谷 利三
嘱託研究員	数学	竹中 暁
研究員	生物化学	中島健太郎
〃	膠質化学	佐多 直康
助手	実験物理学	萩田小一郎
〃	理論物理学	石黒 桂六
〃	理論化学	倉野 勝三
〃	生物化学	田村 忠徳
事務長	庶務会計	木下 勝造
事務員	〃	豊川 純一
その他図書係、工手、小使等九名		

客員研究員 生物化学 岩尾 次郎

〃 〃 西岡 国啓

〃 理論化学 本出英三郎

〃 数学 高橋 進一

昭和八年（一九三三）に至り、前述の大阪帝国大学と塩見理化学研究所との協定にもとづいて、これら研究所員の中、岡谷、浅田、千谷、佐多が大学の教授または助教授に就任した。⁶⁾

開所以来、昭和六年（一九三一）頃までに行われた研究所員による主な研究業績を挙げると、清水武雄の連続アルファ粒子発生機の考案、レントゲン線を用いる物質の特性の研究。小倉金之助の補間法理論に関する研究、日本数学史の研究。岡谷辰治の医学における統計学的研究。古武彌四郎、岩尾次郎によるトリプトファンなどのアミノ酸代謝の研究。内藤鋼一の灌流溶液反応のガマ心臓に及ぼす影響についての研究。近野政次のアミノ酸の定量法の研究。浅田常三郎の水銀灯の研究。竹中暁の聯立線状積分方程式、正則函数などに関する研究。中島健次郎の動物体内のアミノ酸の分解の研究などである。²⁾

昭和十二年（一九三七）に至って金利の低下により財団の資金運用が困難となったために、まず数学部と生物化学部を廃止し、さらに物理学部を縮小して化学部に重点を置くこととなった。⁶⁾それに伴って小倉所長は昭和十二年三月に研究所を辞任、佐多愛彦理事が昭和十七年（一九四二）まで所長を兼任した。また当時研究員であった八木秀次は昭和十七年に東京工業大学長に転任した。同年二月、大阪帝国大学理学部に膠質学の新講座開設に伴い、研究員佐多直康が同講座教授に任

ぜられたのを機に、本研究所の施設を同講座に提供し、同時に佐多直康を研究所長に補した。同年十二月の研究所職員は左のように変っている。

理事	佐多 愛彦	助手	成瀬 宣三
監事	塩見 高年	〃	河野 銓彦
協議員	岩橋 大六	〃	張崎 幸夫
〃	一瀬 桑吉	〃	渡辺 愛
所長	佐多 直康	事務長	木下 勝造
研究員	浅田常三郎	工手、補員等	一〇名
〃	千谷 利三		
〃	小泉 正夫		

昭和六年（一九三一）頃より昭和十六年（一九四一）に至る間の塩見理化学研究所の主な業績を挙げると左の通りである。²⁾

佐多直康らの膠質学的研究、特に超音波の膠質学的作用についての研究。浅田常三郎の高圧水銀灯の研究。千谷利三、小泉正夫による重力の研究。八木秀次の超音波の研究などが活発に行われた。また理学部助教授として赴任した湯川秀樹も一時塩見理化学研究所の一室を使用していた。ノーベル賞受賞の中間子理論の着想もこの研究所と無縁でない可能性がある。

六 塩見理化学研究所の解散

第二次大戦およびその戦後を迎えた塩見理化学研究所では財政的、

物質的な危機に見舞われていたが、幾多の困難を排して研究活動が続けられていた。時に戦後になってその資金状況が悪化し、専任研究員を置くことができなくなった。したがってたとえば文部省の科学研究費も受ける資格がなくなり、大阪大学理学部に在籍する研究員が各自の研究室の一拡張部として研究所建物を使用していたというのが当時の実情である。

戦後から昭和二十九年（一九五四）頃までの塩見理化学研究所における研究を挙げると、浅田研究室においては演色性のよいストロボスコープの研究、アルゴン水銀放電管の研究、写真撮影用閃光放電管の試作、放電管における外部放射の影響についての研究。千谷研究室においてはチタン精錬に関する研究。佐多研究室においては界面活性剤の研究、各種化合物に対する超音波作用の研究などが行われていた。

昭和三十一年（一九五六）に至り、当時の大阪大学正田建次郎総長より塩見理化学研究所佐多直康所長に対し、研究所を大阪大学に移管してはどうかとの提案があり、研究所としては塩見の名称を何らかの形で残すこと、研究所の建物面積約四〇〇坪を理学部内に新たに建て増して確保することを条件にこの提案を受諾することとなった。

塩見財団の最後の役員会は昭和三十一年三月二十九日研究所において開かれた。その時の解散理由書を左に示す。

解散理由書

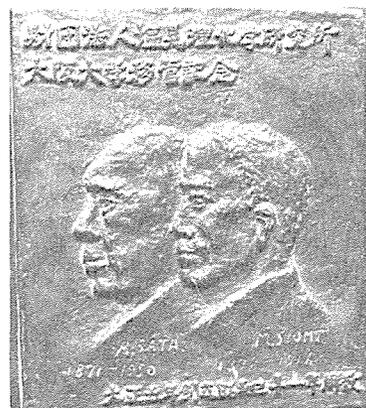
財団法人塩見理化学研究所は塩見政次氏が明治三十三年大阪医科大学の前身大阪医学校を卒業後当時我が国化学工業の不振を慨嘆して、大阪重鉛鋳業株式会社を創立し、大成功を遂げた結果、その全資産

の約半額を提供し、母校である大阪医科大学長佐多博士に「理化学及びその応用を研究すること、並びにこれに関し堪能なる人物を養成する」ことを創立の趣旨として財団法人を組織することを発表された。同博士は深くこの意思に感激、相協力して大正五年十月三十一日一切の手続を了え、設立の認可を受けたものである。

以来本研究所は学界並びに化学工業界に大いに裨益したが、特に昭和六年三月大阪帝国大学理学部の創設に貢献し、更に大阪帝国大学の設置後は同理学部のため絶大な寄与がなされ、その研究業績は毎年多数に上ったのであった。

戦争の激化と敗戦後の経済事情の激変は当法人にとってもその打撃は大きく、戦後においては収入は激減し、人件費、研究費の支出は極めて困難となっている。

その上、当法人研究所の建物が大阪大学構内の一部を敷地に借用しているのであるが、同大学の発展、拡充に種々支障を与えていることは大きな見地から当法人の存在は不都合であろうことは間違いないものと考えられる。



塩見理化学研究所大阪大学移管
記念レリーフ（昭和31年）

これ以上存続することは財政的に経営が困難となった事実にもとづいて事業を継続するよりこれを解散し、むしろ本研究施設の一部を大阪大学に寄附し、

もって同大学の施設として利用した方が一層設立趣旨に副うであらうという協議員全員の決議に基き、本研究所を解散せんとするものであります。

さらに次に示すのはその解散に当たつての財団役員の決議文である。⁷⁾

財団法人 塩見理化学研究所

決議

財団法人塩見理化学研究所は大正五年十月財団設立後大正十五年三月研究所建設以来三十年に亘り理化学の基礎及应用に関する研究を続け此間昭和七年大阪帝国大学理学部創設に際しては其母体たる機能を果し一応寄附行為による目的を達成したわけであるが、敗戦による経済的混乱のため財団としても漸次維持資金に不足を生じつつあるにより、此際財団を解散し、寄附者故塩見政次氏の遺志を尊重し、大阪大学理学部の用に充てる事及び塩見理化学研究所の名称を存続する事を条件に現存の研究所の建物設備一切を大阪大学に寄附する。

右決議する

前研究所長	協議員	小倉金之助
理学博士	協議員	千谷 利三
元研究員	協議員	竹原 八郎
東京都立大教授		
理事		
監事	協議員	塩見 俊彦
同	同	高見 健一

研究所長	同	佐多 直康
阪大教授	同	浅田常三郎
研究員		
阪大教授		

昭和三十一年（一九五六）三月三十一日塩見理化学研究所は四十年の特異な歴史を閉じた。それはあたかも三十九歳で世を去つた塩見政次が生きたことを願つた後半生のものであつた。研究所の建物、設備一切は大阪大学に寄附され、建物は医学部付属癌研究施設の使用するところとなつた。因みにこの時理学部に寄附移管された図書類は二、八七九冊、評価額一三、三六六、八〇〇円であつた。⁷⁾その後研究所建物面積相当分を理学部の増築計画とは別に確保することが実際に計画されたが、基礎工学部新設問題とからんで困難となり、結局は実現するに至らなかつた。

七 おわりに

まえがきにも述べたように現在、豊中地区の理学部内に塩見記念室の名を冠した一室を残し、主として化学科、高分子学科の講義、講演、業績発表会、その他の集会など多方面に利用している。この記念室の戸棚には戦時中供出された塩見政次の銅像の原型塑像を残している。また癌研究施設構内に残っている花崗岩の台座（底辺約一メートル四方高さ二・二〇メートル）には原敬の筆で

鹽見政次君之像 泊堂 原敬書

と刻されている。その裏面には次のような語が録されている。



塩見政次の銅像（大正8年）

名古屋市西川彦太郎君故人の誼を追憶し遺像を贈らる仍て浪華の名工平清氏に囑して工を成し庭内に建立して永遠に伝ふ

大正八年十月下浣

〔注〕

- 1 『吾が半生』高見健一編 大正六年十月。
- 2 『財団法人 塩見理化学研究所要覧』塩見理化学研究所 昭和六年六月発行 昭和十七年増訂。
- 3 『神島回顧』伴芳子著 昭和五十四年四月。
- 4 『佐多愛彦先生伝』高梨光司著 昭和十五年五月。
- 5 『大阪大学五十年史 部局史』大阪大学 一五四頁 昭和五十八年三月。
- 6 『一数学者の回想』小倉金之助著 筑摩書房 昭和四十二年。
- 7 塩見理化学研究所 解散時間関係書類 大阪大学理学部蔵。

（しば てつお 大阪大学理学部）